# 守弘先生とのお別れ

花田　昌宣
熊本学園大学水俣学研究センター長

守弘仁志先生が、2019年９月18日他界された。享年63。

守弘先生は、1990年、中央大学大学院社会学専攻から熊本短期大学社会科に講師として赴任された。以来熊本学園大学にて教育研究に従事されていた。

1994年４月、大学改組に伴う社会福祉学部設置にあたり社会福祉学科に異動。専門は広報論、マスコミュニケーション論と学内資料には記されている。大学院生時代には、原子力開発計画の中で核燃料サイクルの施設設置計画が持ち上がっていた青森県のむつ小川原の社会調査にも出かけておられる。

2010年、水俣の将来の地域のあり方を検討する過程で、みなまた地域研究会のメンバーとともに球磨郡山江村を訪問。守弘先生の引率でCATV（Cable Television）や住民による情報発信をしていた山江村ケーブルテレビのインタビューに出かけたものだ。

守弘先生が水俣学に加わったのは2005年からであるが、社会福祉学部や大学院でのフィールドワークには加わっておられたので水俣との付き合いも長い。また、ご尊父が防府セメントのエンジニアで原田正純先生の知己であったようで、世界が繋がっていることをここでも確認した次第。

私自身は、熊本学園大学社会福祉研究所の研究プロジェクトで守弘先生と一緒に沖縄を訪問調査した。各人が研究テーマを持って動くのだが、共同調査としては当時所長であった丹野喜代子先生や戦争経験者とともに南部戦跡、神の島といわれる久高島など訪問した。守弘先生のフィールドである南大東島は日程上行けず、次回にと約束していたが、果たせないままになってしまった。

守弘先生は、本学に全盲の学生が入学してきた時、学生の支援グループ、レシアンが立ち上がった際、教員として加わった５人のうちの一人で、点字教材作成システムを作り上げるのに尽力してくださった。学生たちと一緒にいてニコニコしておられるのがよく似合っていた。

さて、水俣学研究調査プロジェクトに直接参画していただいたのが、水俣病公式確認60年の被害者アンケート調査であった。その際は、調査設計、調査表作成、SPSS（統計ソフト名称）を用いての分析に主要な役割を果たしていただいた。８千人あまりを対象とし、回答数2,600あまりという調査だったので、この種の調査経験のある守弘先生に内容面、技術面で尽力していただいたのである。とくに、入力され集計されたデータをクロス集計したり、統計的に分析する際には、研究メンバーからの「これとこれをかけて」とか「こんな集計がしたい」など様々な要望にいつもの口癖の「はいはい」とこたえながら、翌日には結果を持

ち寄ってくださっていた。持病を抱えておられ、体調と付き合いながらの仕事であったが、「できません、だめです」といった言葉を聞いたことがない。

守弘先生は、1999年の社会福祉学部福祉環境学科の教員紹介で次のように書かれている。

「私自身は『現地主義』であり、地域社会の情報化、特に離島の情報化が専門と思っているので、過去に東京都小笠原島（熊本から飛行機と船で二泊）、沖縄県大東島（熊本から飛行機でまる一日）などの現地に何回も行って調査をしてきました。こむずかしく考えるよりも（それはあとにして）まず、基本的なことを体験したり、考えたりということを重視したいと思います。そしてその結果、『このような勉強をして、自分の出来る範囲内でどのような分析をし、自分は何を感じ、考えたか』というところになることを期待しています。このような自分なりの感想を持つことが次に勉強するときの機会になると思うからです。(….)」

ここに水俣学という学問と通底するものを見出す。

個人的な付き合いも長く、書くべきエピソードも多いのだが、今はただ、ご冥福をお祈りすることとしたい。